

詩余ものがたり 北宋篇(二)

詩余ものがたり 北宋篇(二)

— 清・葉申薌『本事詞』 —

松尾肇子

二十四、沈邈^{しんぱく}

宿州^{しゅうしゅう}の軍營の芸妓だった張温卿^{ちやうんけい}は、容貌も芸も当時第一で、会えば夢中にならない者はいませんでした。沈邈は裁判所の役人となつて赴任し、最も思いをかけていました。任期が満ちて去ることになつても、忘れることができず、船旅の途中で、彼女のために〔剔銀灯〕二首を作りました。初めの一首は次のようです。

二首目は次のようです。

今夜 隋の運河に風は強く、
霜は河の水と混じり合い空は鏡のようだ。
古い柳の揺れる堤は長く続き、
冷たいもやは立たず、
波の上を月は流れて影も無い。
どうして耐えられようか、
まばらな星の向こう、
はぐれた渡り鳥が互いに鳴き交すのがしきりに聞こえてくるのに。
感じやすいのは病というのは本当だった、
酒は来ず、

愁いに満ちた腸がまたも醒める。
何枚も重ねた薄絹の掛け布団、
残り香はもとのままでけれど、
いつになれば鴛鴦の枕を重ねて並べられようか。
あなたを待たせるけれど、
蘭(のような操)で約束するよ、先に決めた再会の時を。
川のあたりに秋の空は高く 霜が早い、
雲は清らかで月は掃いたよう。
渡りの雁が初めて飛び、
コオロギは苦しげに啼き、
またも黄菊がしおれていく。
しずかに照らす、
美男の潘岳^{はんがく}の鬢にも
白髪がひかり老いていくのを。
どうして耐えられようか 酒は醒めぼつんと浮かぶ船で、
千里のあなたを望み、長安の西で笑う。

腕には化粧のあと、
胸にはおしろいと混じった涙、
ひそかにあまたの別れの愁いを引き寄せる。
この思いを誰に明かせよう。
再び会えるのでなくて。

後に張先、黄孝先が相繼いで裁判官となって（赴任し）、やはり張温卿を大變に誉めました。たまたま陳求古が光祿丞として来て酒を専売にし、温卿は身を預けることになったのです。二年後に亡くなりましたが、わずかに十九歳でした。黄孝先は詩を作って弔いましたが、その詩はこのようなものでした。

人生なにより情が多くてはならない。
みすみす仙花は結び終わらなかった。
彼女のために都の才子に呼びかけよう、
詩句で張温卿を哭するがよいと。

二十五 柳永

柳永は初め名を三變といい、兄の三接、三復とともに有名で、当時「柳氏三絶」と称えられました。思いがけないことに科擧に落第し、たわむれに（鶴冲天）をつくって云うには、

黄金の輝かしい掲示板に
思いもかけず首席及第の夢は消え去った。
素晴らしい御代でも賢者が取り残されるのは
どうすることもできない。
風雲に乗じることができないのであれば、

詩余ものがたり 北宋篇（二）

どうして勝手気ままにしないでいられようか。
合格を手にしたか失敗したかを論じる必要などない。
才能ある詩人は、
無官の大臣なのだ。

霞たつ花街に
ぼんやりと彩色の屏風。
幸いにも意中の女は、
訪ねることができる。
しばらくは紅と翠の華やかな世界に身を任せ、
風流な事を、
いつも楽しもう。
青春は一瞬、
くだらない名譽を、
一杯やりながら低い声で歌を口ずさむ楽しみに取り替えるのは忍びない。

これもその場の気晴らしの作でしたが、都で大いに流行り、陛下のお耳にまで届きました。この時仁宗は儒教にのっとった雅さを慕われ、浮ついた華やかさを斥けていらしかったので、これを聞いてむっとなさいました。その次の科擧で、柳永は及第しました。合格者が天子の御前で名前を読み上げられた時、陛下は、「その者は『一杯やりながら低い声で歌を口ずさん』でおればよいのじゃ、なぜ『くだらない名譽』が必要なのだ。しばらく詞を作っておれ。」とおっしゃいました。柳永はそこで自ら「勅旨を奉じて詞を作る」と称したのでした。景祐年間、やっと再び及第することができ、名前を変えてから、ようやく成績を調べられて官職につけてもらいました。柳永と孫何大臣とは身分と無関係な交わりを結びました。（はじめ）孫何が杭州を治

詩余ものがたり 北宋篇(二)

めていた時、門の警備は非常に厳しく、柳永がお目にかかろうとしても、門の役人は取り次ぎませんでした。そこで(柳永は)「望海潮」の詞を作り、名妓の楚楚を訪ねて言いました。「孫大臣にお目にかかりたいのですがお目通りを得ません。もし役所の宴会が開かれたならば、どうかその朱い唇で私のためにこの詞を歌ってください。もし誰の作かとお尋ねがあったら、柳七とだけ言ってください。」折良く中秋の夜の宴会で、楚楚は柳永のためにゆるやかにこれを歌いました。すると思ったとおり誰の作かとお尋ねがありましたので、柳七と答えるところ、孫何はその場で柳永を招き宴席に着かせました。その詞はこういうものです。

中国東南の景勝の地、

江湖の都会、

銭塘は昔から繁華なまち。

かすむ柳 美しい橋、

風にゆらぐ簾 翠の幕、

立ち並ぶ十万の家々。

雲のかかる木々が堤の砂州をめぐり、

怒濤は霜雪のように白い波頭を巻き、

天然の堀は果てしなく深い。

市には朱い玉が連なり、

家には綺羅が満ち、

豪奢を競い合う。

幾つもの湖 重なる峰 清らかに美しく、

秋のキンモクセイ、

十里連なるハスの花が咲く。

羌笛が晴れた空に響き、

菱取り歌が夜に浮かび、

楽しい釣りとハス取り娘。

千騎の軍隊が高く旗を掲げ、

酔いに乗じて笛太鼓を聞き、

霞む夕焼け空を吟じつつ愛でる。

いつの日かこの美しい風景を絵に描き、

宮廷にもどって誇られよ。

しかし、この詞は遠く伝わり、金の海陵王に杭州の呉峰に馬に乗って立ちたいとの志を抱かせるに到って、またも歌作りの巧みさを責められることになったのです。

二十六、呂士隆

呂士隆が宣州の町の長官だったとき、好んで芸妓をむち打ちました。たまたま杭州の芸妓の来ることがあって、呂士隆は喜びました。別の日にまた宣州の芸妓をむち打とうとすると、芸妓は次のように述べました。「むちを断ることは致しませんが、ただ杭州の芸妓がここに落ち着かないのではないかと心配です。」そこでこの芸妓を許しました。梅堯臣はそのため長短句をつくって次のように言いました。

カモを打ってはなるまいぞ、

カモを打てばオシドリを驚かす。

オシドリが新たに池で水浴びするのは、

孤洲の老いたマナヅルに比べようもない。

二十七、蘇軾と秀蘭

蘇軾が杭州の知事であったとき、役所の同僚と西湖で宴会を催しました。多くの芸妓がみな集まったのに、秀蘭だけが来ず、將軍が催促し、しばらくしてようやく来ました。その理由を問い詰めたところ、答えるには、午後の入浴のあと眠ってしまい、ふと門を叩く音を耳にして、起きてみると、將軍がせかしておいででしたので、化粧を整えて急ぎお召しに応じましたが、思わず少し遅れましたとのこと。そのとき役人の中に秀蘭に思いを寄せている者がおり、内緒のことがあったのだと責めると、秀蘭は懸命に弁解するものですから、蘇軾も頬を緩めました。最後まで疑いを解けませんでした。ちょうどザクロが花盛りで、秀蘭は一枝を座に献じましたが、その役人は恭しくないとますます怒り、秀蘭は進退に窮しました。蘇軾は囲みを解いてやろうと、〔賀新郎〕の詞を秀蘭に授けて歌わせました。その詞はこういうものです。

雖にえさを運んで燕が華やかな部屋を飛び、
ひっそりと人影もなく、桐の木陰は真南を回り、
夕方の涼しさのなか湯浴みした。
手にした白い薄絹の団扇をもてあそぶ、
その扇も手も玉のよう、
しだいに眠くなり、ひとりぐっすり眠りに落ちた。
御簾の向こう 刺繍の戸を押すのは誰。
夢に見ていた（仙境の）瑶台の曲を無理に途絶えさせた。
またなんと、風が竹を叩いたのだった。

ザクロは朱いハンカチを縮ませたような花びらを半ば吐き、
水に浮く花びらと波に漂う芯がすべて尽きるのを待って、
ひとりぼっちの君のお伴をする。
あてやかな一枝を細かに見れば、

詩余ものがたり 北宋篇（二）

芳しい花の心は千重に束ねたよう、
また恐れるのは秋風に葉が散らされること。
君がここに来てこの花に向かうのを待って、
花の前で酒を酌み交しても触れるに忍びない。
おしろい混じりの涙と花と、
ともにはらはらとこぼれ落ちる。

秀蘭は蘇軾のこの命令を聞いて喜び、歌いながら酌をしました。声も姿もともに素晴らしく、席にいる誰もが楽しみを尽くして終りました。

二十八、蘇軾と王夫人

蘇軾が潁州の知事だったとき、折しも正月で、座敷の前の梅が咲き、月の色も鮮やかに晴れておりました。王夫人が、「春の月は秋の月の色に勝ります。秋の月は人を悲しくさせますが、春の月は人を和ませます。趙令時さんたちをお召しになって、この花の下でお飲みになりませんか。」と言いました。蘇軾はおおいに喜んで言いました。「僕は君が詩をつくれるとは知らなかったよ。いまのは本当に詩家の言葉だね。」そして趙令時を呼んで飲み、その席でこの言葉を使って小篇の詞を作りました。

春の庭に月は真南、
ゆらゆらとゆれる春の酒に月影は舞おうとする。
歩みを回廊に転じれば、
半ば落ちた梅の花がやわらかに香る。

そよ風に薄い霧、
すべて若者が行楽するところ。

詩余ものがたり 北宋篇(二)

秋の月光が、

恋人と離れている人の悲しみの腸を照らすのには似ていない。

二十九、蘇軾と燕子楼

蘇軾が徐州の知事だったとき、ある夜(白居易が詩に詠じた)燕子楼に泊まり、(主人の張建封に操を立てた歌姫)盼盼を夢に見ました。そこで「永遇楽」を作っていました。

明るい月が霜のよう、

よい風が水のよう、

清らかな景色は限らない。

湾になった港に魚がはね、

丸いハスの葉に露がそがれ、

ひっそりとして見る人もない。

たんたんと五鼓の太鼓の音、

かきりと一葉、

驚いて夢は破られ気持ちはふさぐ。

夜はまだまだ長く、

もう一度尋ねようにもあてどなく、

起き上がって小さな庭を巡り歩く。

空の果て 旅に疲れた旅人は、

山中の帰り道に、

故郷を眺めやるが心の目も届かない。

燕子楼はむなしく、

あの美しい人はいったいどこにいるのか。

むなしく楼に閉じこめられているのは燕。

今も昔も夢のよう、

これまで本当に夢から覚めたことなどあっただろうか。

ただあるのは過ぎ去った歎びと新たな恨み。

いつか南楼の夜の風景に向かって、

私のために嘆いてくれる人はあるだろうか。

この詞は書き終えたばかりで、まだ歌わせたことがなかったのに、町中にすでに大評判となりました。蘇軾がその出所を突き止めたところ、なんと夜回りの兵士から出たというのです。この者を召して問い詰めたところ、答えて、「私は音楽が分かります。先だって張建封の廟に宿直しておりましたところ、この歌を歌う者があるのを聞きました。そこで覚えて伝えたのです。(お召しの理由が) どういうことなのかさっぱり分かりません。」と言うのです。蘇軾は笑って彼を許しました。

三十、蘇軾と閻邱

閻邱が黄州の長官だったとき、棲霞楼を作り、この町一の名勝と言われました。蘇軾が黄州に左遷されて住んでいたとき、夢を見ました。小舟で長江を渡っていて、川のなかほどで振り返ると、棲霞楼の上では歌や音楽がにぎやかで、船頭は、閻邱太守様が客をもてなしているのですと言うのです。目が覚めてからこのことを不思議に思い、「水龍吟」を作って夢を書きとどめました。その時、閻邱はすでに官を退いて嶺南から帰り蘇州に住んでおりました。詞というのはこうです。

小さな船で春の長江を横切り、

緑の壁に赤い高樓が立ち上がっているのを寝転がって見た。

雲の間から笑いながら話す声がするのは、
太守様の華やかな宴、
美しい人も半ば酔っている。
悲しげな琴の音色、
艶やかな歌の響き、
雲をめぐり水をめぐる。
古い友人は年老いても、
風流のまだ衰えないことを思い、
一人振り返るのだ、
もやにかすむ波の中。

目覚めてみればぼんやりとして見えず、
ただ人氣のない長江を、
月明かりが千里のかなたまで照らしている。
聞くところでは（范蠡ならぬ閻邱は）五湖に、
小舟をうかべて帰って行くのに、
なお西施（のような美人）を連れて行ったとか。
雲夢沢の南の州、
武昌の南の岸で、
昔遊んだことをきくと覚えているだろう。
多情の人は夢の中で、
確かに私に会いに来てくれたと思うのだ、
またきつとそうに違いない。

閻邱は蘇軾と旧交があり、蘇州に居た頃は、蘇軾はここを通るたびに、必ず数日滞在しました。さらにこのように言ったこともあります。「蘇州に通るかかって、虎邱を遊覧せず、閻邱に会わないのは、ふたつの欠事だ」と。深く心を寄せていたことが分かるうというものです。

詩余ものがたり 北宋篇（二）

蘇軾はまた閻邱の笛を吹く侍姫で、懿卿という名の者に〔水龍吟〕を贈ったことがありました。

楚の空に長い竹が雲のよう、
笛を作るのにふさわしい優れた竹は千本の竹の林からも抜きんでて突き出している。
（節に生える）龍の鬚（のように細かい小枝）は半ば剪り、
（その下は）鳳凰の胸のようにかすかにふくらみ、
（表面は）玉のようにうつくしい肌。
木々が淮南の地に葉を落とし、
雨が雲夢沢に晴れ渡り、
月が明るく照り風が軟らかく吹く。
中郎の蔡邕が見えなくなり、
桓伊が去った後、
幾度の秋に背いたことか。

聞くところでは嶺南の太守には、
後ろの部屋の奥深くに緑珠のように艶やかで若い姫がおられるとか。

美しい窓辺で笛を学び、
梁州の曲はようやく通して吹けるようになったが、
霓裳の曲はまだ終わらない。
微音をかみしめ宮音を含み、
商音をくつがえし羽音を流し、
一吹きすれば雲のかかる梢に届くほど。
太守殿のために、
南蛮の瘴気を含んだ風雨を洗い流し、
霜気の満ちた明け方に変えてしまう。

三十一、毛滂もうぼう

蘇軾が杭州の知事だったとき、毛滂が司法参事軍事でしたが、蘇軾は多くの人々と同様に扱っておりました。毛滂と軍官の芸妓の瓊芳じゆうほうとは良い仲でしたが、任期を終えて去るとき、「惜分飛」を作って別れを記しました。

涙がはらはらと顔を濡らし露のついた花のように
愁いが眉のみどりに集まる。

この怨みを半分引き受けようと思うけれど、
まったく言葉もなく空しく見つめ合うばかり。

とぎれとぎれの雨も雲も心が無いのか、

寂しいことよ 毎朝毎晩。

今夜山の奥深く、

消え入る魂は流れの帰るのに託そう。

たまたま蘇軾が客をもてなしたとき、瓊芳はこの詞を歌いました。
蘇軾が誰の作かと尋ねたところ、毛滂との返事です。蘇軾は嘆いて、
「役所の官吏の中に詞人がいたのに知らなかったのは、僕の失態だ。」
と言い、手紙を書いて呼び戻し、数ヶ月をうち解けて過ごしました。

三十二、蘇軾の「江神子」

蘇軾はある日（杭州の西湖で）孤山こさんに遊び、客とともに竹閣ちくかくの前にある臨湖亭リンコウテイに座っていました。突然美しい船が漕いで来て、だんだん

と亭の前に近づきました。美しく化粧した数人が見えましたが、その中の一人がやや年長で、雅な風情がまさっています。箏を弾じ始めますと、ゆったりとして趣があり、二人の客はどちらも視線を送りました。しかし曲が終わらないうちに、ひらりと行ってしまいました。蘇軾は戯れに「江神子」を作りました。

鳳凰山ほうおうざんのふもと 雨は晴れたばかり

水も風も清らかで

夕焼けが明るく照り映える。

一輪のハスの花が、

開き切ってもなおしなやかに美しい。

どこから飛んで来たのか二羽のシラサギ、

思いがあるように、

すらりとしたハスを慕っている。

ふと聞こえてきた川面の悲しげな箏の音は、

思いをこめるようで、

誰に聞かせようとしているのだろう。

もやも雲も収まって、

ぼんやりとしているのは湘水の女神か。

曲が終わるのを待ってたずねようとしたのだが、

人影は見えず、

いくつかの峰が青黒い影を見せている。